

はじけるこころ

Vol.46

まいにち学校  まいにち街  の中 こどもの笑顔につなげる

編集・箕面市人権教育推進会議

発行・箕面市教育委員会人権施策室

TEL:072-724-6921

E-mail:edujinken@maple.city.minoh.lg.jp

平成30年(2018年)12月

この情報紙は、保育所・幼稚園・小中学校の保護者を初め、広く市民のみなさんに、身近な人権教育の話題を知っていただくため、市民参加方式で編集したものです。

ご家庭で子どもさんと、あるいはご近所や職場のかたと、こうした話題にふれて、語り合っていただければと思います。

あすチャレ！スクール

パラアスリートと共にスポーツを体験し、リアルな声を聴く

◇講師 永尾 嘉章 さん

(パラリンピック日本人最多となる7大会に出場。アテネ・パラリンピック日本選手団主将、1600mリレー走で銅メダル獲得。100m、200m日本記録保持者)

7月2日～5日、とどろみの森学園、北小学校、彩都の丘学園、菅野東小学校、第三中学校の5校におい

て、パラリンピックのメダリストによる、障害者理解教育「あすチャレ！スクール」が実施されました。この事業は、日本財団パラリンピックサポートセンターが元選手を学校へ派遣し、子どもたちと選手との交流を通して、

考える心

*他者とのことを自分ごととして

*可能性に挑戦する勇氣

*夢や目標を持つ力

について考え、学ぶ体験型授業です。



もくじ

あすチャレ！スクール	… 1
教職員人権教育研修 子どもの貧困について考える	… 2
菅野小学校 学習発表会 朗読劇「平和のバトン」	… 3
教職員支援教育研修 「愛着障害・発達障害の理解とそ の支援」	… 4
豊川北小学校 部落問題学習 「江戸時代の身分制と 人々のくらし」	… 5
先生から子どもたちへすすめる 『出会いの100冊』	… 7
心ふるえる本に出会ってほしい	… 7
編集後記	… 8

まずは、講師の永尾さんから、車いす陸上やパラリンピックについての紹介がありました。パラリンピックは現在22競技あるそうです。迫力のある車いすバスケット、記録が伸び続けている走幅跳、視覚障害選手とサポートするガイドランナーとの息を合わせた走り等、オリンピックとは違ったパラリンピック競技ならではの面白さが伝わってくるお話でした。競技用車いす「レーサー」に乗ってのデモンストレーションでは、永尾さんの高度なパフォーマンスと自在に車いすを扱う様子を生で見ると、子どもたちは「ワウ」「速い」「すごい」「カッコいい！」と感嘆の声をあげていました。パラリンピックの迫力を感じることができたようです。

次に、子どもたちや先生たちによる車いすリレー大会です。永尾さんの様子を見て、簡単そうに見えていた車いすの扱いが、思いのほか難しい様子で、なかなか前に進めなかったり曲がれなかったり…。しかし、周りの友だちの声援に励まされながら、精一杯頑張って楽しんでいました。先生たちのリレーでは、応援する子どもたちの間に一体感が生まれ、自然と大きな拍手が起っていました。

最後に永尾選手からパラスポーツを通じて得た経験や教訓を交え、子どもたちへのメッセージを語ってもらいました。「好きなこと、興味のあることを見つけて、あきらめずになんでもチャレンジシ

してほしい。あきらめずに頑張ったことは大きな宝物になる。」「あきらめない強い気持ちと、周りの応援が大きな力を生み出す。」「障害は、みんなや社会が作っているもので、工夫しだいでなくすることが出来るもの。」「と、力強い言葉の数々に、子どもたちは聞き入っていました。

お話の後の質問コーナーではたくさんの子もたちが時間を惜しむことなく手を挙げていました。印象的だったのは、「ひとつ願いが叶うなら何を願いますか?」という質問に対し、永尾さんが



「足を動くようにしてほしいとは思わないと思う。この体だからこそ体験できた面白くて素晴らしい思い出がいっぱいあるから。」「と答えられていたことです。障害があるということのイメージや考え方が大きくゆさぶられた時間になったのではないかと思います。

教職員人権教育研修

子どもの貧困について考える

◇講師 「コミュニティ・スペースSocia」代表
木村 友香理 さん

7月30日、教育センターで行われたこの研修では、子どもの貧困問題がとりあげられました。貧困を抱える家庭で「しんどい、さみしい」思いをしている児童生徒について、理解を深め、教職員として何が出来るかを考えるとともに、今後の教育実践に活かすことをねらった研修でした。

講師の木村さんは、社会福祉士の経験を経て、現在はスクールソーシャルワーカーのほか、京都市で子どもと地域をつなぐ居場所コミュニティ・スペースSociaの代表を務めておられます。

現代の日本において貧困に苦しむ子どもがたくさんいるなんて想像できないですが、ここでいう貧困とは、相対的貧困、すなわちその国の文化水準、生活水準と比較して困窮した状態を指してい

ます。

具体的には、経済的な理由で高校に行けないとか塾に行けないなどの状態であり、相対的貧困の子ども比率は、2015年で7人に1人となっており、無視できる状態でないことを知りました。

受講者をグループに分けて、2つのワークをしました。最初に相対的貧困家庭の家計をイメージし、相対的貧困状態の家庭においては、いろいろなことを切り詰めないで生活できず、それが子どもにも影響するだろうということが認識できました。

次に、学校で問題行動を起こしている小学4年生男子の事例を踏まえて、原因はどこにあるのだろうか、解決の糸口はどこにあるのだろうかということ、グループごとにディスカッションして、意見を発表しました。

また、貧困を背負って生きる子どもたちを描いた「智の物語」という会話を鑑賞しました。貧困がきっかけでいじめにあった生徒が、先生達の尽力や家族の協力で学校に行けるようになり、無事卒業するというお話でした。

今回の研修で、貧困を背負った子どもへの今後の対応について、ヒントとなった点も多々あったと思います。私自身も、現代の日本で貧困やいじめがあるなんて想像できなかったのですが、身近な問題ととらえるよい機会となりました。

(人権教育推進会議 市民委員 河野 強)



菅野小学校 学習発表会 6年生
朗読劇「平和のバトン」

菅野小学校では6月2日に学習発表会を実施しました。6年生は「平和のバトン」と題して朗読劇を行いました。

4月から平和に関する調べ学習を進め、5月11日12日には広島へ修学旅行に行き、平和資料館を見学したり、被爆者のかたから直接お話を聞いたりしました。

そうした活動を通して、戦争の恐ろしさ、悲惨さを学び、戦争をしても何も解決しないということ、今でも戦争をしている国があることを知るとともに、「身近な平和って何だろう」「今、自分たちができることは何だろう」ということを自ら考え、発表会を行いました。

みんなの平和が続くように、6年生から在校生や発表会を見に来られた方々に、「平和のバトン」をつなぐことができたと思います。なぜなら見ている人の真剣なまなざし、表情がそこにはたくさんあったからです。



(児童の感想より)

Aさん

今年の学習発表会は、これまで経験してきた学習発表会と比べても、一番、忙しかったです。

学習発表会委員として、衣装の用意が大変でした。効果音とか、発表中の動きとかも、戦争の様子がよく伝わるように工夫しました。見ている人たちにしっかり伝わったかなと思います。

私は100%の全力を出すことができたので、平和のバトンを見てくれた人全員に渡すことができました。

Bさん

本番前になると、それまでは全然緊張していなかったのに、急に緊張してきました。でも全力で発表をすることができました。

家に帰るとお母さんに「6年生の発表、本当に、本当によかったよー!」と拍手をしながら言われました。

その時、私たちがやってきたこと、「平和」について伝わったなあ、平和のバトンがつながったなあ、と思いました。すごくうれしかったです。

(萱野小学校)



教職員支援教育研修

「愛着障害・発達障害の理解とその支援」

◇講師 和歌山大学教育学部 米澤 好史 教授

8月20日、箕面文化・交流センターにおいて行われたこの研修では、愛着障害と発達障害を峻別して理解し有効な支援につなげるため、愛着障害研究の第一人者である米澤教授にお話を伺いました。

近年、「気になる子ども」が増えています。例えば、してはいけないことを注意すると余計にその行動が増えたり、愛情を試すような行動や危険な行動を取ったり、衝動的な暴力行為が収まらなかつたりするような子どもです。そのような子ども



に対し、従来の対応や指導ではうまくいかないケースが増えていきます。こうした子どもを理解するために、「愛着障害（AD）」という視点が必要だと米澤教授は説明されました。

「愛着（アタッチメント）」とは、特定の人と結び情緒的なこころの絆」であり、この愛着形成の障害を、発達障害と混同して発達障害の支援を行っても功を奏しないこと、発達障害と愛着障害をきちんと見分け、それに応じた支援を行うことが重要ということです。

発達障害は脳機能障害に起因しますが、愛着障害は関係性の障害であり、誰にでも起こりうるものです。そして、身近な誰かと関係性を結びることができれば、いつでも愛着を修復することができます。

愛着障害や愛着の問題の発見のポイントについてのお話もありました。同じ「多動」という現れ方としても、ADHD（注意欠如多動性障害）の場合は「いつも」多動であり、ASD（自閉症スペクトラム障害）の場合は、「居場所感喪失時」の多動です。愛着障害は感情の問題によるため、「ムラのある」多動として現れます。

今日の研修では、具体的な支援方法のところで残念ながら時間切れとなりましたが、当日は200名近い参加があり、発達障害や愛着障害への関心の高さを実感しました。

豊川北小学校 部落問題学習

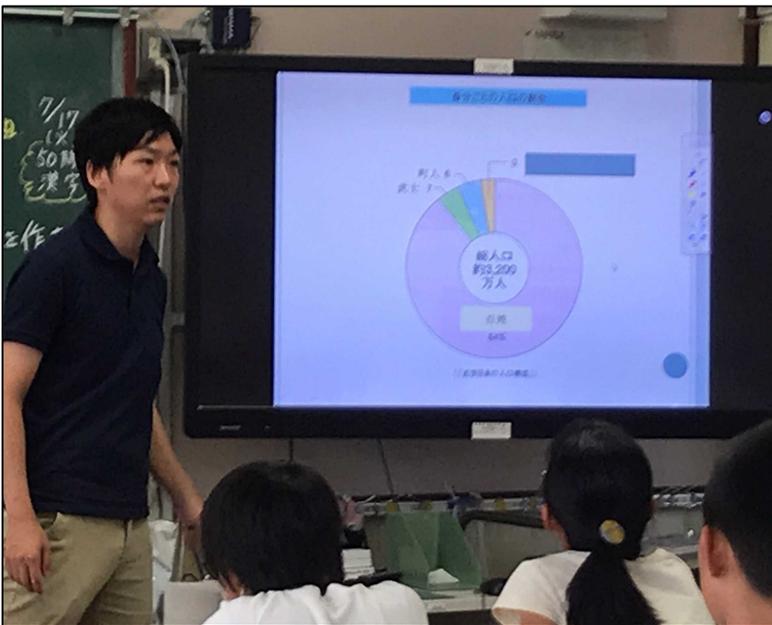
6年生社会科

「江戸時代の身分制と人々の暮らし」
 ↓身分が決められた中で、それぞれの身分の人たちはどのような暮らしをしていたのだろうか↓

◇ゲストティーチャー

大坪 研介 教諭（菅野小学校）

7月11日、豊川北小学校にて、歴史教科書を活用した部落問題学習の公開授業が行われました。



江戸時代、幕府や藩は、身分のちがいをもちに支配をかためました。

武士は、政治をおこない、名字を名のり、刃をさすなどの特権がありました。農村などに住む百姓や、商人と職人からなる城下町に住む町人たちは、おもに農業や商工業の仕事をしていました。これらの人々は、武士に支配され、ねんぐなどを納めて武士のくらしを支える身分とされました。

さらに、百姓や町人からも差別された人々もいました。これらの人々は…。

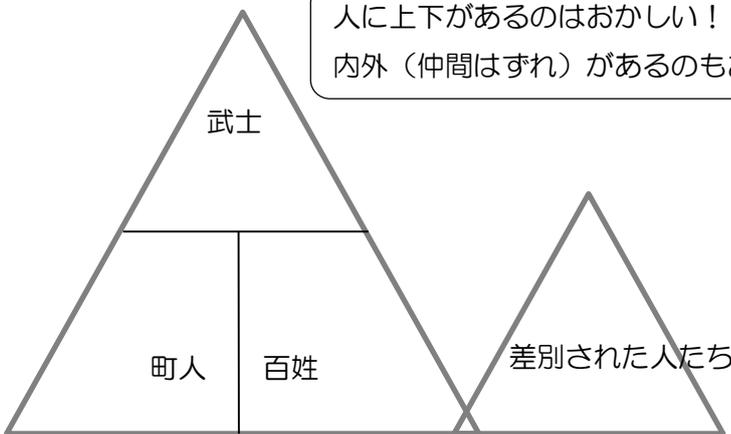
（日本文教出版「小学社会6上」より）

授業で子どもたちは、先生の話をつなずきながら聞き、感じたことや考えたことをつぶやいたり手を挙げたり、大変意欲的な様子でした。室町時代で学習した、銀閣の庭園造りをした差別された人たちのことをよく覚えていて、これまでに学んだことと結びつけながら授業を受けていました。時代が進む中で暮らしやすくなるどころか、さらに厳しい差別を受けるようになったことに驚いた様子です。江戸時代の頃には、住む場所が固定されてしまったことや、服装や行事・祭りの参加などで厳しい制約を受けたことを知り、差別された人々がこの社会の変化にどのような思いでいたのか想像を膨らませながら授業を受けていました。人々の暮らしに欠かせない大切な仕事を任されて



いたにも関わらず、「仲間はずれ」「無視」される世の中になっていったことに、『おかしい』『ひどい』等、差別された人たちの気持ちに寄り添った感想を書いたりつぶやいたりする子どもが多く見られました。

1学期の社会科の授業は江戸時代に入ったところで終了になりますが、2学期には江戸時代の中頃から現代までの歴史を学習します。この後、人々が不合理な差別とどのように立ち向かっていったのか、先の学習が気になる授業でした。



人に上下があるのはおかしい！
内外（仲間はずれ）があるのもおかしい！

※2001年検定の教科書から、「土農工商」という言葉は消滅しています。

〔資料〕 上下と内外の2つの差別

豊川北小学校では、数年前より歴史教科書を活用した部落問題学習について授業研究を進めており、今回も、関心のある教員がたくさん見学する中での授業でした。大坪先生の助言を受けながら、今後も社会科授業での部落問題学習の研究・実践に取り組んでいく予定です。

1 庭造り	東山文化を支えた人々
2 身分制	固定された身分と人々の暮らし
3 腑分け	解体新書と近代医学の基礎を築いた人々
4 渋染一揆	差別を闘いぬいた人々
5 廃止例	明治維新
6 水平社	大正デモクラシー
7 日本国憲法	教科書無償化
8 差別撤廃	あらゆる人権課題の解消に向けて

〔資料〕 小中の教科書でふれられる同和問題

現在、小中学校の教科書に同和問題（部落問題）の記述が8箇所ほどあります。子どもたちの人間関係づくりや当事者との出会い、地域学習などの人権教育とともに、社会科の「歴史」「公民」で部落問題について学習することによって、差別やいけないことに「それはおかしい」と疑問を持てる力、様々な人権問題の解決や将来の展望を考えられる力を育てたいと考えています。

先生から子どもたちへすすめる

『出会いの100冊』

「心ふるえる本に出会ってほしい」

「本っておもしろい」と感じられるような本に出会ってほしい——中小学校では昨年度から『出会いの100冊』という取組をしています。教職員が子どもに読んでほしい本100冊を選び、難易度で10段階にわけ、学年ごとに設定された目標の段階までの本を読んでいく、という活動です。

ふだんはなかなか手に取られない人権問題・社会問題をテーマにした本、生き方を考える本も取り入れました。

子どもたちは読んだ本にチェックをしていき、学年目標をクリアすれば表彰されます。11月から始めて、3学期の終わりには100人以上が目標を達成しました。

取組が始まると、子どもたちは予想を上回る反応を見せました。休み時間ごとに図書館に来て読む子がいたり、『出会いの100冊』どこまで読んだ?』との会話が校内で聞こえたり、市立図書館でも『出会いの100冊』のリストを手に本を探している子を見かけました。

おもしろかった本を友だちに勧め、その子がまた別の子に勧めるという動きも起こって、5年生

のクラスではある作者の本が大ブームになりました。

また、教職員のお手製の紹介カードを本につけたところ、ふだんはめったに借りられない本がどんどん借りられていきました。知っている先生や好きな先生が勧める本は、少し難しくても読みたい気持ちになるようです。

本を読むということは、それぞれの好みが大きく影響しますし、読む時は一人の世界ですが、子



どもにとって何より大事なものは、人との関わりなのだということを実感しました。これからも、人と本をつなぎ、人と人をつなぐ学校図書館でありたいと思います。
(中小学校図書館)



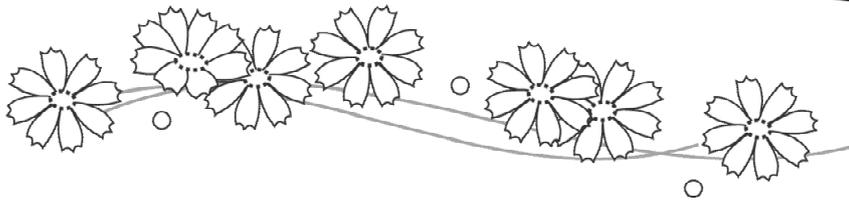
☆編集後記☆

一昨年、国において障害者差別解消法、ヘイトスピーチ解消法、部落差別解消推進法の3つの法律が制定されました。また、箕面市では、これまで各校園所のほか、さまざまな機関で人権教育に取り組んできました。このような取り組みにもかかわらず、この間、市内で障害者差別・部落差別に関する落書きが見つかり、今年は小学校などで差別投書が発見されました。このことは非常に残念であり、教育委員会としては学校現場とともに今一度、人権教育のさらなる充実に取り組まねばならないと考えております。

人権について学び、意識を高められる場所は、学校園所だけではありません。子どもが多くの時間を過ごす家庭や地域での教育も大切です。保護者や地域の大人が、偏見をもたず、差別しないことを、日常生活を通じて子どもたちに示すことが重要だと考えています。

そのため、子ども、教職員、保護者、地域の人々の相互のつながりを大切にしながら、新箕面市人権教育基本方針の中に掲げる、子どもの人権、部落問題、男女協働参画、障害者、在日外国人・国際理解、様々な人権、という6領域について全小中学校で取り組んでいます。

これからも、保護者の皆様には「イキイキさわやかに学ぶ会」やこの紙面等を通じて、人権教育の取組を進めますので、ご理解とご協力をお願いいたします。



「はじけるこころ vol.46」はいかがでしたか？

みなさんのご意見・ご感想をお聞かせください。下記の①～④の内容を、郵送、ファクスまたはEメールにてお送りください。これからも人権教育に関心をもっていただける記事を掲載したいと思っておりますので、ぜひともお言葉をいただけることを編集委員一同お待ちしております。

記

- ①ご意見・ご感想、②お名前（無記名でも構いません）、③「はじけるこころ」の入手方法、④（「はじけるこころ」に掲載する場合がありますので）ご意見・ご感想掲載の可否について

〒562-0015 箕面市稲 1-14-5 箕面市教育委員会人権施策室

FAX : 725-8360

Email : edujinken@maple.city.minoh.lg.jp